

地球は 24 時間でぐるっと一回転自転し、さらに太陽の周りを 365 日かけて楕円運動している。海の干満、昼と夜、寒冷と温暖、雨や風、台風や地震など自然現象は莫大なエネルギーが伴う。

地球のみならず、銀河そのものが毎秒 30 キロメートル以上の猛スピードで移動をしているといわれる。地球が回るとか天気や季節が変わるとか、普段当たり前すぎて変だとは感じないが、よくよく考えてみると非生命はとてもよく動く運動系である。



浜辺に立って水平線を眺めた経験があるだろうか。果てしなく遠くの海を見ているのかと思うと意外と近い距離しか見えていない。それは地球が丸いので人の背丈からみた場合、目線と水平線との接点が 10 キロメートルにも満たないという単純な理由による。高い展望台があればグッと遠くが見える。アメリカ大陸の発見者はコロンブスではなく、マストの上の見張り番だったという笑い話さえある。笑い話のついでに桂枝雀さんのオーストラリア旅行の落語を一つ。

オーストラリアは南半球にございますな。夏と冬が日本と逆さま。風呂の栓をぬくと水の渦巻きも逆さまになる。何でも逆さまですなあ〜。お陽さんも西の空から夕暮れて、段々お昼になって、東の空に沈むときにはじめて朝が来る。地球儀をこうやって覗きこむところに逆さまにクッ付いておりますから立つのもむずかしい。落とされんようにしがみ付いてください!?

落語は面白い。ホントの逆さまはウソかホントか?

地球は丸い。でも人も海水も振り落とされることはない。それは地球に引力が働いているからである。

「そんなこと誰でも知ってる」と思われるだろうが、それが誰も実のところを知らない。引力は見えないし作り出すこともできない。「有る」ののだが「無い」不思議な力なのである。

ニュートンはりんごの木から実が落ちるのを見て、万有引力の法則を発見したという。質量があるモノにすべて引力という力が働いていることを理論化したのだ。しかし事実が分かっただけのことで、引力は「働き」という機能であるから取り出すわけにいかない。しかも「こうなっている」とは言っても「こうする」ことはできない。

この「有る」ののだが「無い」不思議な引力は、わたしたち生物の生長に大きく関与しているということも分かっている。次の図を見てほしい。

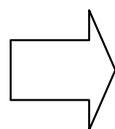


遺伝子DNAの二重螺旋構造をワトソンとクリックが解明して半世紀になる。地球上の全生物が同じ4つの記号を使ってDNAを構成し、形と機能はDNAによって決まることも分った。今や生命は設計図である遺伝子DNAですべて語られる時代になった。

そこで上の模式図から説明したい。これは受精卵が2つに分裂する様子と考えてもらいたい。図には書けないが、受精卵は分裂する前から地球の重力(引力)によって遺伝子DNAの入った核ではない細胞質の方に植物極と動物極をつくり、分裂のたびにDNAからどの設計図を読み出すかを決めるという。8分割された細胞のときには、すでにからだの腹側と背側などの配置が決まっているらしい。

『水虫撃退法』準備①

1. 穀物酢 1.5 リットルを鍋で 48℃ まで加熱する。



準備②

2. 加熱した酢をバケツに移す。そのとき酢の温度は 45℃ になっているはず (かなり「熱い」と感じる温度)。



クローン技術で人間のコピーが誕生する時代だが、この技術も同様に卵細胞中の細胞質に、その人以外の遺伝子DNAを読み出す能力があるから可能なわけで、もしも細胞質がただあるというだけの「モノ」であればクローンは生まれようがない。

その「モノ」に意味を持たせているのが地球の重力である。無重力状態の宇宙を飛行するスペースシャトルの中では、イモリやカエルの骨や卵は発育異常になるということでも実証済みだ。

「有る」のだが「無い」重力（引力）が生命を導いてカタチにしている。生命も含め地球上の、太陽系惑星の、宇宙自体の動きすべてが重力（引力）の働きなしでは運動がなりたない。

生命は遺伝子DNAですべて語られる時代と書いたが、DNAの設計図を読むのは周囲の細胞質、つまりDNAに語らせるのは周囲の環境である。

しかもその環境は「無」から生まれ「有る」ものには必ず働きながら、実態がつかめない重力（引力）によってエネルギーを吹き込まれているのである。



人生は自分が選択して周囲が決定している。その決定の受け入れ方で、他人や環境そして自分も変わる。だが無秩序に変わるということではない。自然は許容と秩序をわきまえている。「無」から生まれた働きの力は個人の私欲など入り込む隙間はないだろう。未来は必然的に用意され淡々と遂行されていると考えたい。

京都大学に今西錦司博士という方がおられた。動物学者だった今西博士は、自然淘汰、突然変異など機械論的なダーウィンの進化論に異見を述べた人物として知られている。

今西博士は、強い種が勝って残り弱い種が消えるという弱肉強食的なダーウィンの適者生存ではなく、競争に負けた種の中には追いやられた先の環境に適した食性と形態をもった種があると考えた。強い者だけの勝ち残りではなく、強者も弱者も環境に適応したかたちで棲み分けていると説いた。

また哺乳類であるコウモリの手が翼化という進化を辿ったことについて、今西博士はこう述べる。

誰が考えても手があのような翼に突然なったとは思わない。かといって手とも翼ともいえない中間的な体で長期間にわたって生存するのも無理がある。それにも増してランダムに突然変異した一匹が、ランダムに全体を変えたら、翼になるにはいったいどれだけ待たなければいけないだろうか。

今西説では「翼になるのには全体が一斉にそしてすみやかに移行したのだろう」と結論している。環境の変化にそのとき、全体の進化のスイッチが入ったと考えた。「なるべくしてなった」のだ。

哲学者西田幾多郎は「生命的世界は、物質的世界のように現在が過去から決定される機械論的世界ではなく、むしろ現在が未来から決定される目的論的世界である。」と述べている。

過去の条件がどうであれ、進行形である未来のその先の環境や条件に合うように、現在の世界が用意されている。つまり、生命は過去に引きずられているのではなく未来に引っぱられているといえる。

今わたしたちにできることは未来の自分のあるべき姿にどれだけ近づけるかである。結果は納得できるのではないだろうか。

すべては「無」からはじまる。
まだ無い未来も必ず現れる。

足つけ③

3. 30分間、患部を浸す。



ホーム <http://biwahonpo.jp/>

快解ゴールド④

4. 終了したら快解ゴールドを多めに塗る。



試供品(5g入)

①〜④まで一週間毎日実行。

情報、経済、社会・・・
当然「人間」も変化し続ける。
人間の細胞も毎日入れ替わっている。・・・昨日の私は正確には今日の私ではない。

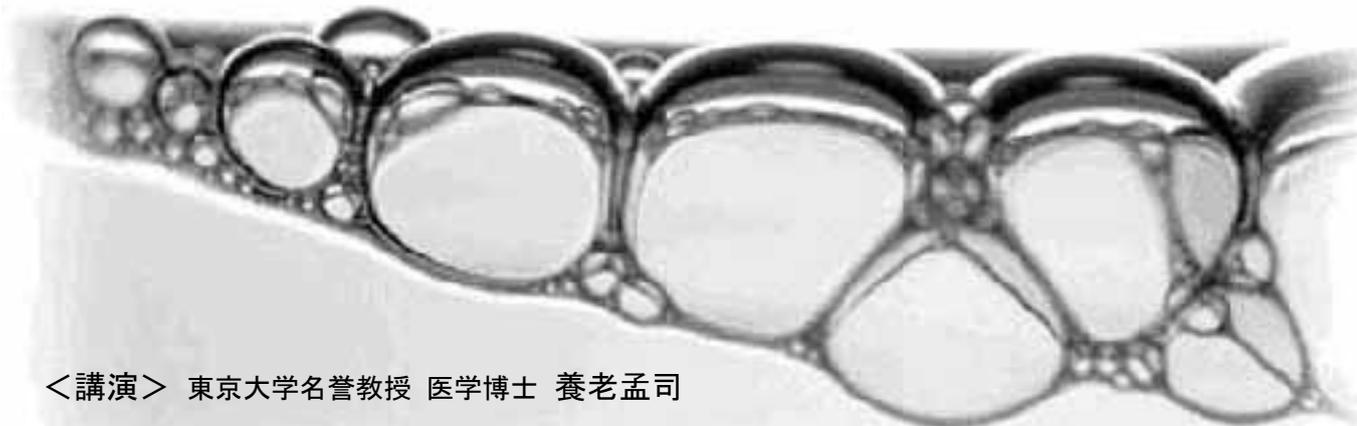
養老孟司講演会

人間科学

脳化社会

「何か」がおかしい。
わたしたちはいつたい「何を」
求めて生きているのか？

解剖学者、養老孟司博士が
「人間」を解剖すると・・・
こうなった。



<講演> 東京大学名誉教授 医学博士 養老孟司



1937 年生まれ。62 年東京大学医学部卒業後、同大学解剖学教室に入る。81 年東京大学医学部教授、専門は解剖学。また脳の研究者としても知られている。『ヒトの見方』(筑摩書房)、『日本人の身体感の歴史』(法蔵館)、『臨床哲学』(哲学書房) など著書多数。89 年『からだの見方』でサントリー学芸賞を受賞。同年出版の『唯脳論』は独自の視点からの洞察に溢れ大きな反響を呼んだ。

<シンポジウム> 全人的医療にむかって

- | | |
|-------|-------------------------------------|
| 養老 孟司 | 左記 |
| 長谷川信博 | NPO 法人日本ホリスティック医学協会中部支部長 医学博士 |
| 渡 仲三 | 名古屋市立大学名誉教授 医学博士 |
| 小出 宣昭 | 中日新聞社 編集局長 |
| 恒川 洋 | 東海ホリスティック医学振興会会長 恒川消化器クリニック副院長 医学博士 |
| 樋田 和彦 | 医療法人ヒダ耳鼻咽喉科理事長 医学博士 |

(司会・進行) 長谷部茂人(長谷部式健康会主宰)

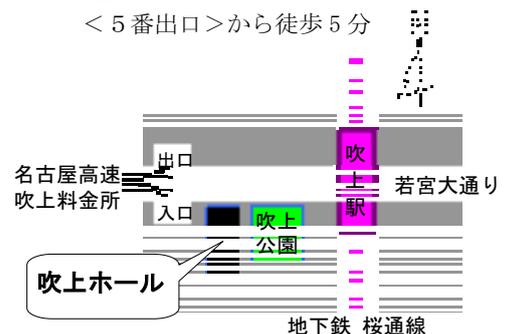
◆ 平成 15 年 11 月 9 日(日) 13:00 開場 講演 13:30~15:00 シンポジウム 15:10~16:10

◆ 会 場 吹上ホール (名古屋市中小企業振興会館) 7 階メインホール 名古屋市中種区吹上 2-6-3 TEL 052-735-2111

地下鉄桜通線「吹上」下車
<5 番出口>から徒歩 5 分

◆ 参加費 前売り 3,000 円 当日 4,000 円

- 主 催 特定非営利活動法人日本ホリスティック医学協会中部支部
- 共 催 東海ホリスティック医学振興会
- 後 援 愛知県 名古屋市 愛知県教育委員会 名古屋市教育委員会 中日新聞社
- 事前にお申し込みの上お振込み下さい
郵便振替先/00800-2-31893 日本ホリスティック医学協会中部支部
- チケットのお申し込み、問合せ先 TEL/FAX 兼 052-413-0810 後藤まで



記載の内容についての詳細・ご質問などは

長谷部式健康会 TEL 0586-46-1258 FAX 0586-46-0367 までお尋ねください。

ホームページ <http://biwanonpo.jp/>